

株式会社印南製作所

顧客のニーズに徹底的に応えるモノづくり

—オリジナル梱包機械に物流業界が注目！

ここに注目！

自社ブランド製品の開発で新規市場を創出
東京都でのモノづくりにこだわり

印南製作所は1957年の創業。当初は金属プレス加工からスタートし、その後、包装機械の製造を主力事業として成長を遂げてきた。現在の代表取締役社長である印南英一氏が入社した1980年頃から機械設計の分野にも進出し、当時まだ高価だったCADの導入や最新の機械設備をいち早く取り入れることで、包装機械だけでなく様々な産業機械の開発設計にも

取り組み、常に時代の先を読みながら変化に対応してきた。現在は、これまで蓄積した技術力や社内一貫生産体制の利点を活用し、新規分野として梱包機械をはじめ、様々な省力化機械の開発・設計・製造を手がけている。

企業理念「断らない印南」

「断らない印南」をモットーに掲げている。他社が断るような難

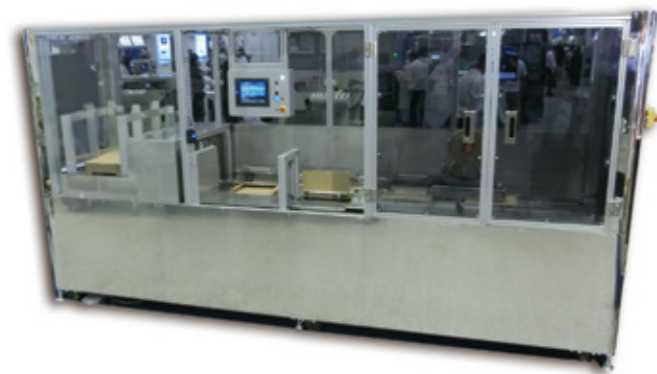
題にも挑戦し、世の中にない独自性と新規性のある省力化機械を多数開発してきたのが、印南製作所の特長だ。そこで培った経験とノウハウが、大企業が手掛けないニッチ市場に対応できるオンリーワンの企画開発力につながった。印南社長は「当社は、様々な業界・業種の製造工程や倉庫作業を直接見てどういう機械でどう改善するか、お客様に合わせたシステムを提案するオートメーション・システム・クリエイターになることを目指している」と語る。

近年、特に注力しているのが自社ブランド製品の梱包機械だ。大手通販サイトからの依頼をきっかけに梱包作業を自動化する機械の開発に着手。その後、メール便の自動梱包機「エコメールパック」を自社オリジナル製品として商品化した。梱包作業は、ひとつひとつ中身が異なるため高速処理が難しく、人海戦術による作業が一般的だが、同社のエコメールパックは専用の段ボール封筒で緩衝材を使わず自動で梱包することができる。処理個数は手作業だと1人平均で毎時120個程度であるのに対し、毎時450個を処理することができ、梱包時間や人件費を大幅な削減を実現した。「人口減少が進み、個人消費が伸び悩む中でもネット通販市場は伸びており、梱包作業の設備による自動化・省力化はまだまだ伸びる可能性がある」（印南社長）という。

さらにポスト投函便に対応した自社ブランド品の薄箱自動梱包機「トリニティーキューブ」は、



メール便自動梱包機「エコメールパック」



ポスト投函型薄箱自動梱包機「トリニティーキューブ」



自社オリジナル製品 全自動ポスター巻き機



本社外観

2019年の発売以来、物流業界のコスト削減に大いに貢献している。こうした自社オリジナル製品の開発をきっかけに展示会にも積極的に出展し、開発力・技術力を発信することで新規分野からの引き合いも増えている。

「東京でモノづくり」にこだわり

生産拠点を都内の1カ所に集約するこだわりもある。顧客にとっては、国内のみならず海外からのアクセスの良さは大きな利点。特

に同社は、企画から設計・製造・組み立て・据え付け・保守メンテに至るまでオール内製化しているため、1拠点に集約することで、顧客は来訪すれば全工程を見てもらうことができるほか、不具合があった際にもスピーディーに対応することができる。

2017年に新たに開設した「INNAMI FA BASE」は、オリジナル製品の開発支援室や、全社のIoT化も進め、部門間のネットワークも強化している。工場内のレイアウトにも工夫があり、各フ

ロアに業務セクションを配置することによって、より集中的な業務管理を行っている。

また、都内の住宅地に隣接しており、地域との共存のために外観はもとより、防音、異臭、振動など環境にも配慮したモノづくりを心掛けている。地元の小中学生を対象とした工場見学会や、インターンシップも積極的に受け入れ、地域に根差した取り組みもしている。

「わが社を語る」

代表取締役社長
印南 英一氏

「違い」を認め合うことで新たな価値を創造

当社の社員は20代から70代まで、年齢層が幅広いことが大きな特長です。様々な世代が価値観を共有し、「和」を大切にするとともに「違い」を認め合うことで新たな価値を創造します。また、全社員にモノづくりの基礎を身に付けてもらうため、技能試験や資格取得を推奨するなど、時期を見て社員に成長の機会を与え、若手であっても自由に意見を言え

る環境を作っています。社歴を重ねても若い力を積極的に取り入れることで決して老いない企業として成長し続け、一世紀事業所を目指しています。

会社 DATA

所在地：東京都足立区宮城 1-12-22

創業：1957（昭和32）年3月

代表者：印南 英一

資本金：1,000万円

売上：14億7,730万円（2020年度）

社員：61名（2021年9月現在）

事業内容：包装機械製造・梱包機械など省力化機械のオリジナル製品の開発・販売

URL：https://www.innami-factory.co.jp/



株式会社ウェーブロック・アドバンスト・テクノロジー

めっき・塗装からフィルム成形へ、自動車の進化を下支え
—電波と光線を透過する金属調加飾フィルムで自動運転が容易に

ここに注目!

異なる特徴を持つ素材を最適な「組み合わせ」で複合化し付加価値生む
2024年3月期売り上げは59億円を計画、100億円目指し土台づくり

株式会社ウェーブロック・アドバンスト・テクノロジーは、東証1部に株式上場するウェーブロックホールディングス株式会社の全額出資会社だ。異なる特徴を持った素材を最適な組み合わせで複合化して提供し、付加価値のある製品を生み出している。中でも金属調加飾フィルムは、電波と光線を透過するので自動車の安全・自動運転システム構築が容易になるうえ、めっきや塗装よりも地球環境に優しい。SDGs（持続可能な開発目標）によって二酸化炭素（CO₂）を排出しない電気自動車（EV）などへの転換が進んでおり、同社には追い風が吹いている。

「CASE」で事業拡大の好機、米、独の現地法人・名古屋工場立ち上げ

金属調加飾フィルムは、金属と樹脂を組み合わせたフィルム（テープ、シート）の樹脂部分を押出機内で溶かして成形したり、型に流して射出成形したりする。「市場は2005年ごろに2億円し

かなかった。10年ごろにマツダに漆調の内装で採用していただいた。当時は売り上げの7～8割がマツダ向けだったが、改良・改善対応と並行して開発を進め大変だった」（島田康太郎代表取締役兼執行役員社長）。それが今では、スマートエントリーシステム対応のドアハンドルや、レクサスのホイールキャップ、リンカーンのフロントエンブレム、シボレーのエンブレムなど一般的に使われるようになった。カラーバリエーションは「100色以上ある」（島田社長）ので、ゼロハリバートンブランドの旅行鞆やテレビなど家電分野にも採用されている。

自動車の内外装の装飾と言えば、長年、めっきと塗装が代表格として君臨している。しかし、30年をゴールとする国際社会共通のSDGsにより、有害性が議論される物質が一部に含まれるめっきと塗装には逆風が吹いている。自動車の技術トレンド「CASE」（接続・自動運転・シェアリング・電動化）によってデザインも大きく変わる。金属調加飾フィル

ムには防錆性に加え、電波・光線透過性、カラーバリエーションという“武器”がある。とくに自動運転には電波透過性が不可欠であり、ウェーブロック・アドバンスト・テクノロジーは事業拡大の好機を迎えている。

このため同社は「18年に米国現地法人と、パーツ製造の名古屋工場、19年にはドイツ現法をそれぞれ立ち上げた。川下に出ることでフィードバックが早くなり、ノウハウも蓄積できる」（島田社長）と布石を打った。技術・デザイン開発面では鋼板加飾、広幅供給、成形性向上などに注力し、市場創出を目指す。

品質管理・材料開発で優位性さらに、EV加速の欧米・中国の販売強化

ウェーブロックホールディングスは21年6月に中期経営3カ年計画を公表した。この中でウェーブロック・アドバンスト・テクノロジーについては、最終年度の24年3月期に売上高59億円（21年3月期は41億円）、営業利



古河工場の技術スタッフ



国内展示会出展の様子



北米現地法人（デトロイト）のチームメンバー

益5億円（同7,000万円）を計画し、営業利益率8.5%と8%台に乗せる見込みだ。「塗装は環境問題があるので、海外のEVメーカーは使いたくない。一段上の品質保証とし、この3年で売上高100億円への土台をつくる」と島田社長は売上高100億円を視野に入れる。

具体的な事業戦略は①技術開発・製造基盤の整備への投資②強固な品質管理システムの構築③海外（北米・欧州・中国）の販売力強化—の3点。「フィルム材料は特殊だ。製造できるメーカーは世界的にも数少ない。この3年で材料開発をさらに加速し、技術的な競合優位性を確固たるものとする」

（島田社長）。古河工場（茨城県）で製造している金属調加飾フィルムでは、電波・光透過、環境負荷低減だけでなく、耐候性・耐薬品性等の性能を付与して車の外装案件を獲得していく。また、一関工場（岩手県）で製造している車載用ディスプレイパネル用シートでは、パネルの曲面化、大型化、タッチパネル化やヘッドアップディスプレイの搭載増加を受け、表面硬度と耐衝撃性の相反する物性を両立させたPMMA（アクリル樹脂）/PC（ポリカーボネート樹脂）二層シートなどを拡大する。

EV化は欧米、中国で加速しており、現状の売り上げは「すでに日本よりも海外の比率が大きい」

（島田社長）。とくに中国はEV・ディスプレイ分野で世界最大の市場となる見通しで、中国およびグローバル案件の取り込みがカギになっている」（島田社長）。このため事業成長のスピードは欧米、中国のほうが速くなりそうだ。

ウェーブロック設立57周年の21年6月1日、島田社長はタブロイド誌に「世の中に求められる小粒でピリッとした製品を創り続ける」と書いた。素材と素材を組み合わせて新しい価値を生む同社のDNAは、新型コロナ対応の飛沫防止フェイスガードを誕生させてもいる。

わが社を語る

代表取締役兼執行役員社長
島田 康太郎氏



「白地に絵を描く」チャレンジによって、夢を実現できる会社

新しいものを生み出していく当社の事業は、答えがない中でやっており、「白地に絵を描く」ことが求められます。そこで大事にしているのは「メンバー一人ひとりがやりたいことと、当社がやりたいことがマッチできていること」です。メンバーはどの方向に行くか、戦略を考えながら勉強やチャレンジを行い、夢を実現していったほしい。それができる会社です。

そのために、半年に1回はメンバーにやりたいことを聞いています。考課

は、1年でやるべきことを4項目くらい選んでもらい、「チャレンジできたか」「進んでいるか」「成果は出たか」を評価します。メンバーには「失敗しても成功しても泣ける仕事をする」という思いで取り組むよう求めています。泣けるほどやったら、必ず次につながるからです。「立ち止まることは悪だ」というカルチャーが根付き、コロナ禍でも台東、つくば、川口の3つのサテライトオフィスが機能して変化に対応できるようになりました。



本社受付



加飾フィルム・パーツの採用事例

会社 DATA

所在地：東京都中央区明石町8-1 聖路加タワー13階
設立：2010（平成22）年4月1日
代表者：島田 康太郎
資本金：1億円
従業員数：90名（2021年4月30日現在）
事業内容：合成樹脂、各種材料の加工・販売およびコンサルティング
URL：http://www.wavelock-at.co.jp/



株式会社エイチワン

脱炭素社会に向けた技術・商品開発を目指す自動車部品メーカー
——ヒト×技術力×生産力で独自のモノづくりに挑戦

ここに注目!

プレス加工、溶接加工、金型製造を網羅した高度なモノづくり技術
ESGの取り組みと働き方改革を先取りした前向きの経営スタンス

自動車の最重要テーマとなっている軽量化。一方で、乗員の命を事故から守る衝突安全性。この相反する機能を高い次元で実現させているのが自動車車体フレームだ。文字通り車体の骨格となるフレームは、自動車の基本性能にかかわる重要保安部品。この車体フレームの国内有数のメーカーとしてグローバルに活躍しているのが、株式会社エイチワンだ。株式会社ヒラタと株式会社本郷という同じプレス部品を営む2社が、2006年に合併してエイチワンは誕生した。金田敦社長は「(ヒラタを創業した)平田源七氏と(本郷を創業した)今井俊明氏という二人の創業者に恵まれた。プレスを極め、顧客に喜んでもらうことを求めた両氏の思いは、当社のコアコンピタンスとして受け継がれている」と説明する。

燃料電池用金属セパレータの生産も

まずはプレス加工、溶接加工、金型製造にかかわる高度なテクノ

ロジー。軽量化と安全性を両立させるために、エイチワンでは早くから軽くて丈夫な高張力鋼板を活用してきたが、普通鋼に比べて高度なプレス技術、溶接技術が必要な高張力鋼板で揺るぎない量産技術を確立。さらに加工が難しいとされる次世代の超高張力鋼板にも対応できる態勢を整えた。「EV化の流れが加速してもボディはなくなるならない」(金田社長)とする一方で、最近では燃料電池自動車用金属セパレータの生産を拡充させており、電動化の流れはむしろ同社の収益を押し上げると見られる。

設計開発力の向上も見逃せない。車体フレーム部品は、フロントバルクヘッド、フロントサイドフレーム、リアホイールハウスなど、いくつもの部位に分かれるが、「車一台分のシミュレーションが可能になってきた」(金田社長)という。各部位の最適設計を積み重ねてきた自社ノウハウを生かし、さらに上流の新車開発段階から参画した全体設計へ挑戦し始めている。すでに完成車メーカー

に対する提案をスタートさせており、完成車メーカーに代わって一台丸ごとの車体骨格をエイチワンが開発する日が訪れるだろう。

すでに北米、中国・アジアを中心に海外14拠点を構え、現地生産シフトを積極化してきたが、2021年末には大分県豊後高田市に3,000tプレスを導入した新工場を稼働させるなど、国内設備投資を積極化し体質強化を進めており、同社のモノづくり競争力が一段とアップされる見通しだ。

ESGとサステナビリティを重視

テクノロジーと並び、同社がコアコンピタンスとして掲げているのが顧客のニーズを実現するホスピタリティ。若手社員が中心となってまとめた長期ビジョン「2030年ビジョン」では、自動車業界で存在感を高めるだけでなく、社会に必要とされ、社会に役立つ価値を創出する「Value Creator」になることを宣言。高度なモノづくり技術を生かし、自



W-Hapii社(中国 湖北省):省スペースと効率性の高さを兼ね備えたショートプロセスライン



エイチワンの森:国内外各事業所で環境保全活動を実施

豊後高田新工場:21年12月稼働開始予定。3,000tの大型プレス機をはじめ、プレス・溶接の最新ラインを導入。ソーラーパネルによる自家発電も設置し、「地球にやさしい工場」を具現化している

動車ボディ以外の新たな製品・サービスを生み出すとともに、サステナビリティを重視した経営を通じて、世界に貢献していくエイチワンのあるべき姿を明確にした。例えば、10数年前に始めた「エイチワンの森」づくり。社員総出で地域の里山の枝打ちや間伐を行う環境保全活動は、国内の全事業所の取り組みとして定着。海外事業所でも苗木の植樹などの環境保全活動を展開している。環境

だけでなく、ESG(環境、社会、ガバナンス)全般を推進する社内態勢を組織し、持続可能な社会の実現にコミットしている。

国内約1,300人に対し、海外の社員数は約7,200人。圧倒的に海外比率が高い会社だけに、「海外勤務を志して入社する社員も多い」(金田社長)とか。入社2-3年で海外支援に行くケースもあるほか、希望する部署への異動を申告できる制度もある。さらに

ワークライフバランスでは、水・金の定時退社を徹底し、2006年の合併当初から一般職の有給休暇の取得率100%を実現。管理職も月1回の有休取得が実行されている。「管理職が休みづらいとなれば、管理職になることを敬遠する社員も出てくる。まずは人として幸せな生活をしてほしい」という金田社長。2030年に向かうエイチワン社員の心は、晴れやかで気概に満ちたものではない。

わが社を語る

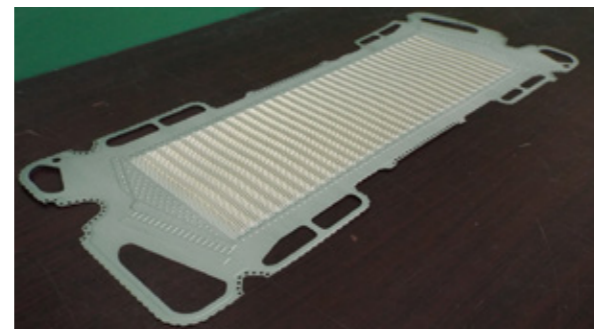
代表取締役社長執行役員
金田 敦氏

期待を超える Value Creator 目指す

当社は、プレス加工技術とともに歴史を積み重ね、自動車の安全性能や環境性能、操作性、快適性に大きく関わる車体フレームの開発・生産を主力事業に、国内のみならずグローバルな供給体制を確立しています。いま自動車業界は、世界的な環境規制の強化の流れを受けて電動化の動きが加速するなど、大きな変化のときを迎えています。従業員全員が「世界に貢献する企



安全性と快適さ、そして地球への優しさを具現化する車体フレーム



金属セパレーター:燃料電池車に採用される燃料電池スタックの構成部品。精密打ち抜き加工技術と精密金型の製作技術が応用されている

会社 DATA

所在地:埼玉県さいたま市大宮区桜木町一丁目11番地5
設立:1939(昭和14)年4月23日
代表者:金田 敦
資本金:43億6,693万円(東証1部上場)
従業員数:連結:7,198名 単体:1,289名(2021年3月31日時点)
事業内容:・自動車部品および、二輪部品等各種金属のプレスおよび溶接加工
・金型溶接設備製造

U R L: <https://www.h1-co.jp/>